
お腹にオチンチン

はるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お腹にオチンチン

【Nコード】

N4281G

【作者名】

はるみ

【あらすじ】

彼女のお腹がちよっとポニョポニョになってきた。そんな物語。

彼女：「やめてよ、お腹にオチンチンを押し付けないでよ」

僕：「へへ、だいぶポニョポニョしてきたから、気持ちいいかと思ってるさ」

彼女：「ヘンタイだね、キミは」

僕：「ヘンタイかな」

彼女：「ヘンタイだよ。もしくは意地悪かな」

僕：「意地悪じゃないさ。キミのポニョポニョを気に入っているんだから」

彼女：「嬉しくないよね」

僕は試しに彼女の最近緩んできたお腹にオチンチンを挟んでみようとしたが、まだ彼女のお腹はそんなにポニョじゃなかった。

僕：「オッパイなら挟めるかな？」

彼女：「それなら挟めるね」

僕は毛布をはいで彼女の胸元にオチンチンをもって行こうとは思わない。

だって、彼女が笑って言うほど彼女の胸が大きくないことは、彼女

の首の後ろを回って胸を揉んでいる僕の
右手が十分に知っているから。

僕は彼女と唇を重ね彼女のアソコを中指で軽く触れてみた。

僕の右手にイタズラされていた彼女のカラダは十分に潤いがあり、
いつでも僕を受け入れる準備が出来ていた。

僕はゆっくりと中指を奥まで入れて彼女の吐息が漏れるのを確かめる。

彼女：「あっ」

彼女の「あっ」を聞くのが僕は好きだった。

大好きになり、恋をした彼女はごく普通に僕を愛してくれていた。

ごく普通に愛するようになると、『大好き』も『愛してる』もちよ
つとばやけてしまう。

きつと大好きを鮮明に照らしていたのは『恋』という眩しいばかり
の光りなんだろう。

でも、その眩しい光りは花火のように短い間しか輝くことはなくて、
その灯りが消えると夜空からは月のほのかな灯りだけが恋人たちを
照らすんだ。

度の強いメガネをかけている僕は、ほの明るい月の灯りだけでは足
元が見えなくて心配になってしまう。

だから彼女のカダラの奥から漏れる「あっ」っていう吐息は、僕にとっては「愛してる」を照らす花火なんだ。

パチパチと小さく輝く線香花火は、僕が腰を高速で動かすたびに大きな打ち上げ花火となって「あっ」から「あああ」に変わる。

そして「もつとして」になった時に僕は鮮明に彼女の想いが照らされる気がする。

彼女：「いくつ、いちゃうよ」

僕：「いいよ、いつて」

僕は彼女に愛いされてることを実感したくて、彼女の中にいる僕のオチンチンをもつと激しく動かす。

どんなに強く彼女の背中に回した手で僕に引き寄せても、どんなに激しく腰を振っても僕には足りない。

もつと、もつと彼女を愛していることを僕の体で表現したくて、もつと彼女のカラダから愛を引き出したくて。

僕は全力で彼女を抱きしめる。

僕：「お腹にいっぱい出しちゃった」

彼女：「キミの製造能力には驚くよ」

僕：「キミといるとすぐに溜まるみたいだよ」

彼女：「なに、お腹になすりつけてるの」

僕：「すべすべになるよ」

彼女：「ガビガビになるじゃん」

僕のイタズラに彼女がゲラゲラと笑い、そのゲラゲラに合わせて彼女のポニョポニョのお腹がちよっと波打った。

コートがいらなくなった朝、ベッドから目覚めた僕に、桜の便りを届けてくれたのは、が可愛いくて知的な女性だった。

「今年は暖かいので例年より二日早く開花しそうですよ」

「そうなんだ、じゃあ、今日辺りはピンクの蕾が固く閉じている桜が見れるんだね」

僕の問い掛けにその女性は答えてはくれず、各地の天気と花粉の状況を告げている。

僕はテレビのスイッチを切って早めに家を出た。

10分間の桜の花見。

会社から一駅前で降りて公園の中を歩く。

細い老木のようなご主人のとなりで、白髪を紫に染めた大きな女性

が桜の蕾に鼻を近づけている。

若草色の春コートのボタンはきつと閉まらないのだろう。

桜の下で楽しそうにご主人を振り返る女性のお腹は、ポヨンになっている。

僕：「若い頃よりずいぶん増量されたんでしょうね」

聞こえないようにご主人に話しかけた。

僕は大好きな彼女が増量されて、彼女への大好きも増量されたいと思っていた。

そして、ポニョからポヨンになったお腹にオチンチンを挟むと大笑いする彼女と、

蕾の桜も、

満開の桜も、

そして緑とピンクのコントラストが美しい葉桜も

見て見たいと思った。

開花の早い年も遅い年も、彼女のお腹をつまんで笑っていたかった。

彼女の背中に回していた右手で僕は桜の蕾を包んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281g/>

お腹にオチンチン

2010年10月13日20時39分発行